

<牧会ミニ通信>No.5

5月17日の定例役員会において、礼拝再開は6月5日と決定しました。もう少しの辛抱です。それぞれ、皆さんが工夫して日々の礼拝を整えておられる様子をお聞きして御名を崇めています。それにしても一月半のブランクは余りにも長いものです。

主に召されて60数年になるわたしですが、これほどのブランクな経験は初めてです。いえ、いえ、プロテスタント教会の歩みが始まった明治5年以来、150年目にして初めてのことです。

250年もの間、潜伏したキリシタンたちの礼拝がどうであったか、思いが忍ばれます。

しかし、何が「さいわい」となるかは分かりません。世の終わりに臨んで、地上の生きとし生けるすべての者の祈りが、「グローバルな祈り」となることが願われているのかもしれませんが。

わたしたちは、「わたし」だけの幸いを願って生きることが、いかに本来の姿ではなく、それが「虚」であり、「空」であり、互いが共に心を低くして、感謝と喜びをもって生きることが人の道であることを聖書から教えられてきました。

「シアワセ」とは「仕合わせる」とも言えます。「生きている」・「生かされている」ことだけでも、「在りえない」・「有難い」・「仕合わせ」であるかと知れば、わたしたちは、どのような試みの中にあっても、決して希望を失ってはならないのです。

新約聖書「ヨハネ黙示録」の最後の章で、「新天新地」への希望を告げた後、あらゆる罪の中で、第一の罪として「絶望する者」を挙げているのは、示唆に富んでいます。(21章8節)。

「待ち望む」ことを学ばねばなりません。どんな事態の中であろうと、決して、自分だけの速まった結論を出してはならないのです。

「待ち望む」ことが、どんなに苦しくつらくあっても、深く心の通い合う人々との日々の出会いを感謝し、祈りながら生きるものでありたいと思います。

周東のぞみキリスト教会・牧師 結城 晋次